漢薬「釣藤鉤」の薬用部位に関する史的考察

御影 雅幸 遠藤 寛子

金沢大学大学院自然科学研究科薬学系資源生薬学研究室, 石川, 〒920-1192 金沢市角間町

Historical Studies about Medicinal Part of Chinese Crude Drug “Uncaria Hook”

Masayuki MIKAGE Hiroko ENDO

Herbal Medicine and Natural Resources, Division of Life Sciences, Graduate School of Natural Science and Technology, Kanazawa University, Kakuma-machi, Kanazawa 920-1192, Japan

Abstract

Japanese pharmacopoeia prescribes a crude drug, Uncaria hook, or the hook-like structures of *Uncaria rhynchophylla* (Miq.) Jacks, *U. sinensis* (Oliv.) Haval., and *U. macrophylla* Wall., while Chinese pharmacopoeia prescribes the hooks with attached stems of above 3 species, in addition to 2 other species of Uncaria hook; *U. hirsuta* Haval. and *U. sessilifructus* Roxb (all in the Rubiaceae family). Our herbological study has found that the botanical origin was *Uncaria rhynchophylla* before the Ming Dynasty, and that the part used was not the hook itself, but the plant's bark till the early Ming Dynasty. Use of the hooks with stems began in the late Ming Dynasty. On the other hand, in Japan, the hooks themselves have been mainly collected from wild *U. rhynchophylla* plants growing in southern warm-temperate zone of Japan, for use in Kampo medicines. We considered this differing Japanese custom was influenced by the descriptions in the *Ben Cao Gan Mu* (1596) written in the Ming dynasty by Li Si Chen, which state that the hook itself had medicinally sharp power. And we conclude that use of *Uncaria* bark alone is reasonable for prescriptions which originated before the early Ming dynasty, such as chotosan.

Key words : Uncaria hook, Chinese crude drug, herbological study, *Uncaria rhynchophylla*, bark, chotoko, chotosan

要旨

日本薬局方では釣藤鉤として *Uncaria rhynchophylla* (Miq.) Miq., *U. sinensis* (Oliv.) Haval., *U. macrophylla* Wall. のとげが規定されているが、中国の局方ではこれら3種以外に *U. hirsuta* Haval.と *U. sessilifructus* Roxb.を加えた5種の鉤をつけた茎枝が規定されている。本草考証の結果、当初の原植物は *Uncaria rhynchophylla* であり、薬用部位は明代前半までは藤皮で、その後現在のような鉤つきの茎枝に変化したことを明らかにした。一方、日本では暖地に自生しているカギカズラの主として鉤が薬用に採集されてきた。このことは明代に李時珍が「鉤の薬効が鋭い」と記したことに影響を受けたものと考察した。釣藤散など明代前半以前に考案された処方には藤皮由来の釣藤鉤を使用するのが望ましい。

キーワード : 釣藤鉤, 漢方生薬, 生薬学, 薬用部位, 釣藤散

緒言

漢薬「釣藤鉤」は、『日本薬局方』には第十四改正第一追補¹⁾に「釣藤鉤 (釣藤鉤)」の名称で初収載され、「本品はカギカズラ *Uncaria rhynchophylla* (Miq.) Miq., *U. sinensis* (Oliv.) Haval. 又は *U. macrophylla* Wall. (Rubiaceae) の通例とげである」と規定され、原植物は第15局²⁾に踏襲されている。また、『中華人民共和国薬典 2005年版』³⁾には「鉤藤」の名称で「*U. rhynchophylla* (Miq.) Miq., *U. macrophylla*

Wall., *U. hirsuta* Haval., *U. sinensis* (Oliv.) Haval., *U. sessilifructus* Roxb. の鉤を帯びた茎枝」と規定されている。このように釣藤鉤の原植物や薬用部位は日中間で一致せず、一般には鉤または鉤つきの茎枝で、枝が細く、双鉤で、紅褐色や紫褐色の光沢のあるものが良品とされてきた。一方、李時珍は「古方多用皮後世多用鉤取其力鋭」⁴⁾と述べており、古くは鉤や鉤がついた細い枝ではなく皮部（以下：藤皮）を薬用に使っていたことが窺える。

表1 主たる中国本草書における名称、性・味、薬用部位・形態に関する記載

時代	年代	本草書名	名称	性・味	薬用部位・形態
漢	不詳	名医別録	釣藤	微寒	
梁	500頃	本草經集注	釣藤	微寒	
唐	659	新修本草	釣藤	微寒	葉細長茎間有刺形若釣鉤者是
宋	1062	図經本草	釣藤		広済及崔氏方療小兒驚癇諸湯飲皆用吊藤皮・葉細茎長節間有刺若釣鉤
	1116	本草衍義	釣藤		中空……長八九尺或一二丈者……小人有以穴隙間致酒甕中盜取酒以氣吸之酒即出涓涓不斷
	1248	宝慶本草折衷	釣藤	平微寒・苦甘	図經曰茎節間有刺若釣鉤寇氏曰中空長八九尺
元	1295	本草歌括 ^{9b)}		平微寒・甘	長八九尺成一二丈葉細茎長節間有刺若釣鉤
	1331	本草元命苞 ^{9c)}		微寒・甘	葉細長茎節間
明	1496	本草集要 ^{9d)}		微寒・甘苦	
	1505	本草品彙精要	釣藤	寒平・苦甘	藤皮・類風藤而有鉤
	1525	本草蒙筌 ⁴⁹⁾	鉤藤	微寒・甘苦	取皮・葉細茎長節間有刺……因茎長中虛、可鑽隙盜酒小兒每取越置甕中口含略吸引之酒出涓涓不斷
	1578	本草發明 ^{9e)}	釣藤	微寒・苦	皮・茎長中虛
	1596	本草綱目	釣藤	平・初微甘後微苦	古方多用皮後世多用鉤取其力銳・其刺曲如釣鉤……狀如葡萄藤而有鉤紫色
	1612	本草原始	釣藤	寒・微甘	古人多用皮後世多用鉤取其力銳耳・葉細長其茎間有刺若釣鉤……藤紫赤有曲鉤
	1622	鵜補雷公炮製藥性解 ^{9f)}	鉤藤	微寒・甘苦	色黃而嫩鉤多者佳
	1624	本草彙言	鉤藤	平・苦微甘	去梗純用嫩鉤功力十倍
	1624	本草正 ^{50a)}		微寒・微甘微苦	
	1630	本草図譜 ^{9g)}	釣藤	微寒・甘	古方多用皮後世多用鉤取其力銳・藤長八九尺或一二丈大如母指其中空茎間有刺若釣鉤紫色葉細長
	1637	医宗必読 ^{9h)}	鉤藤	微寒・甘	去梗純用嫩鉤其功十倍
	1647	本草乘雅半偈 ⁵¹⁾	鉤藤	微寒・甘	古方多用皮今人多用鉤取其力銳耳・狀似葡萄藤長八九尺或一二丈大母指而中空折致酒甕中以氣吸之涓涓不斷茎間有刺宛如釣鉤色並紫赤……藤棘如鉤、中空而通
清	17c. 末	本草易読 ⁵²⁾	釣藤	微寒・甘苦	古方多用皮後者多用鉤取其力銳耳・狀如葡萄藤而有鉤紫色
	1664	本草述 ⁵³⁾	鉤藤	微寒・甘	古方多用皮今人多用鉤……修治皮去節生用或謂木通即葡萄苗者誤矣・狀似葡萄藤長八九尺或一二丈大如母指而中空折致酒甕中以氣吸之涓涓不斷茎間有刺宛如釣鉤色並紫赤
	1666	本草匯 ⁹ⁱ⁾	釣藤	微寒・甘苦	選紫色去梗純用嫩鉤其功十倍
	1681	本草詳節 ^{50b)}	釣藤	微寒・甘苦	凡使用鉤・藤長八九尺葉細長節間刺如釣鉤
	1684	夕庵読本草快編 ⁵⁴⁾	釣藤	寒・甘	去梗用鉤其功十倍・其刺曲如釣鉤……其藤大若親指而中空若人揉穹置瓮中盜酒以氣吸之涓涓不斷鉤取之意亦或因此
	1694	本草備要	鉤藤鉤	寒・甘微苦	藤細多鉤者良純用鉤其功加倍・有刺類釣鉤藤細多鉤者良
	1695	本草逢原 ⁵⁵⁾	鉤藤	寒・甘微苦	取鉤用良取
	1757	本草從新	鉤藤鉤	寒・甘微苦	藤細多鉤者良去梗純用嫩鉤其功十倍・有刺類釣鉤故名
	1761	得配本草	鉤藤鉤	微寒・甘苦	純用鉤力大
	1769	本草求真 ⁵⁶⁾	鉤藤	平微寒・甘微苦	取藤細多鉤者良鉤尤有力
	1833	本草述鉤元 ^{9j)}	鉤藤	微寒・微甘微苦	去梗純用嫩鉤其功十倍・壯似葡萄藤大如母指而中空……茎間有刺宛如釣鉤色並紫赤
	1843	藥性集要便読 ^{9k)}	鉤藤	寒・苦甘	純用嫩鉤良
	1851	本草匯纂 ^{9l)}	鉤藤	平微寒・甘微苦	取藤細多鉤者鉤猶有力
	1887	本草便読 ^{9m)}		寒・甘	純用嫩鉤良・色紫
	1897	本草撮要類編 ⁹ⁿ⁾	双鉤藤	微寒・甘	古方多用皮後世多用鉤取其力銳耳爾・狀如葡萄藤而有鉤紫色

図1 大観本草の記文と付図
右：釣藤，左：烈節

釣藤鉤を配剤する処方に「釣藤散」がある。釣藤散は『普濟本事方』⁵⁾に頭痛，眩暈の治療薬として初収載された処方で，現在では頭痛や眩暈の他に，神経症，肩こり，更年期障害，動脈硬化症，高血圧症などにも応用されている⁶⁾。また，最近の研究では脳血管性痴呆にも有用であることが明らかとなり，広く研究が行われている生薬の一つである⁷⁾。

現在市場に流通している釣藤鉤は，鉤あるいは鉤つきの茎枝が主であり，藤皮に由来するものは存在しない。しかし，李時珍が言うように古方では藤皮を多く用いていたのであれば，宋代に考案された釣藤散には藤皮に由来する釣藤鉤が処方されていた可能性がある。そこで，本研究では古来の釣藤鉤の原植物や薬用部位の歴史の変遷を明らかにする目的で考証研究を行った。

1. 原植物に関する考察 (表1)

漢方生薬は歴史の変遷を通じて，原植物が変化した例も多い。一般に生薬の原植物が変化すると薬能，産地，その他が大きく変化することから，これらについて精査した。

釣藤鉤は『名医別録』⁸⁾に初収載され，原植物の形態に関する記載は『新修本草』⁹⁾に「葉長細茎間有利形若釣鉤者是」と初見される (図1)。それ以降のほとんどの本草書にも「葉細長」，「茎間有利」，「長八九尺或一二丈」の文章が見られ，その記載に変化は見られない。また，釣藤鉤の性に関する記載は『名医別録』に「微寒」と記されて以降，「寒」，「微寒」，「涼」，「平」など多少の変化は見られるが，大きな

変化はない。さらに，釣藤鉤の味に関する記載は『宝慶本草折衷』^{9a)}に「苦甘」と初見され，その後の記載も「甘」または「苦」であり，変化は見られない。婦経に関する記載では『本草綱目』に「手足厥陰」と初見され，心包・肝に入る薬物であることが分かり，以降の記載には「十二経」，「足少陽」，「三焦」などの記載も散見するが，大きな変化は見られない。産地に関しては『集注本草』¹⁰⁾に「建平 (現：四川省巫山縣)」と初収載されて以降，「梁州 (現：陝西省南鄭縣)」，「興元府 (現：陝西省南鄭縣)」，「湖南」，「湖北」，「江南 (現：江蘇・安徽・江西の三省)」，「江西」，「秦中 (現：陝西省)」などの地名が記され，これらは主に中国東部の黄河・長江付近の多湿地域に位置することが明らかになった。

以上，中国の本草書に記載された釣藤鉤の形態，性味，婦経，産地についてはほとんど変化が見られない。このことから，古来釣藤鉤の原植物は *Uncaria* 属植物から変化していない可能性が高いと判断された。

また，形態に関する記載として，『本草衍義』¹¹⁾に「(茎) 中空・・・長八九尺或一二丈者・・・小人有以穴隙間致酒甕中盜取酒以気吸之酒即出涓涓不断」という記載が見られ，以降の本草書中にもしばしば「中空」又は「中虚」という記載が見られる。これらの記載すなわち茎が中空でストロー状になっており甕から酒を吸うことができる種を用いていたとすると，中国に分布する *Uncaria* 属植物で茎が中空となる種は *U. macrophylla* のみである¹²⁾ことから，

釣藤鉤の原植物は本種であったと判断される。しかし、*U. macrophylla* の分布地は雲南，広西，広東であり，先述した釣藤鉤の産地に合致しない。そこで中国産 *Uncaria* 属植物についてさらに検討した結果，『広東中薬志』¹³⁾ に *U. rhynchophylla* の形態として「髓部黄白色，疏松似海绵様，有的髓部已萎縮呈中空状」という記載が見られ，*U. rhynchophylla* も何らかの要因によって髓部が萎縮して中空になるものが存在することが明らかになった。さらに，『本草綱目』に「紫色」という記載が初見され，以降の本草書にも「紫色」という記載が多く見られる。中国に分布する *Uncaria* 属植物の中で鉤及び茎が紫色を呈する種は *U. rhynchophylla* のみであり，さらに付図の葉の形態（図1）も *U. rhynchophylla* で矛盾がなく，釣藤鉤の原植物は古来 *U. rhynchophylla* であったと判断された。髓が萎縮して中空になるような茎はある程度の太さになったものであると判断され，そうした茎には鉤はなく，藤皮が薬用にされていたものと考えられる。

2. 薬用部位の変遷（表1）

釣藤鉤は『名医別録』の下品に初収載されたが，同書には薬用部位に関する記載は見られない。薬用部位に関する記載が初見されるのは『図経本草』⁸⁾で，「広済及崔氏方療小兒驚癇諸湯飲皆用吊藤皮」と記載されており，以降，明代中期を過ぎるまでの本草書には藤皮を用いていたことが記載され，李時珍が言うように明代以前は鉤または鉤つきの茎枝ではなく藤皮が薬用に供されていたことが明らかになった。しかし，『本草綱目』で初めて「古方多用皮後世多用鉤取其力鋭」と記されて以降，藤皮を薬用部位とする記載はほとんど見られなくなり，一方で鉤つきの茎枝を用いるという記載が大半を占めるようになる。さらに『本草彙言』¹⁴⁾には「去梗純用嫩鉤功力十倍」という記載も見られ，茎枝を取り去って若い鉤だけを用いるとさらに効力が増すことが本書以降の本草書にも記載されるようになる。

以上，中国本草書における薬用部位に関する記載からは，明代中期過ぎまではもっぱら藤皮を用い，明代後半から鉤または鉤つきの茎枝が用いられ始めたことと考証できた。

3. 名称の変遷（表1）

釣藤鉤は現行の『日本薬局方』では「釣藤鉤（釣藤鉤）」，『中華人民共和国薬典』では「鉤藤」の名

図2 明代の本草書に掲載された釣藤の付図
右：本草原始，左：本草彙言

称で収載されている。このことは日中間における薬用部位の相違が反映されたものと考えられるが，過去の本草書や医書においても様々な名称で記載されている。

本生薬は『名医別録』に「釣藤」の名称で初記載され，以降宋代までの本草書には「釣藤」の名称で収載されている。その後，明代になると「鉤藤」の名も見られるようになる。また，清代になると「釣藤」，「鉤藤」，「釣藤鉤」，「鉤藤鉤」などの名称が用いられるようになり，現在の『日本薬局方』では「釣藤鉤（釣藤鉤）」が，『中華人民共和国薬典』では「鉤藤」が採用されている。

「釣藤」と「鉤藤」の違いについて，『康熙字典』¹⁵⁾や『大漢和辞典』¹⁶⁾によると，「釣」には《つる（動），つりばり（名）》，「鉤」には《かぎ（名），つる（動），まがる（動）》の意味があり，釣藤，鉤藤は共にその植物の特徴となっているつりばりのような鉤に由来して名づけられたもので，ともに植物名であると考えられる。一方，釣藤鉤や鉤藤鉤は「釣藤（鉤藤）の鉤」の意味で，薬用部位すなわち生薬名を表していると判断される。

これらの名称と薬用部位との関連を検討した結果，藤皮を薬用部位とした『図経本草』，『本草品彙精要』¹⁷⁾などではその名称を「釣藤」や「鉤藤」とし，鉤又は鉤つきの茎枝を薬用部位とした『本草綱目』，『本草原始』¹⁸⁾などでは「釣藤」，「鉤藤」，「釣藤鉤」，

表2 医方書中の龍胆湯について

<痙攣, 発熱を目的とする処方>

時代	年代	書名	配合生薬名	構成生薬名	効能
唐	7c. 中	備急千金要方	鈎藤皮	龍胆, 柴胡, 黄芩, 桔梗, 芍薬, 茯苓, 甘草, 蛭虻, 大黄	治嬰兒出腹血脈盛寒熱温壯四肢驚掣発熱大吐呪者
	682	千金翼方	鈎藤	(同上)	(同上)
	752	外台秘要	鈎藤皮	(同上)	(同上)
宋	1111頃	聖濟総録	鈎藤皮	龍胆, 柴胡, 黄芩, 桔梗, 芍薬, 赤茯苓, 甘草, 蛭虻, 大黄	(同上)
	1174	三因極一病証方論	鈎藤皮	龍胆草, 柴胡, 黄芩, 桔梗, 芍薬, 甘草, 茯苓, 蛭虻, 大黄	治嬰兒出腹血脈盛寒熱温壯四肢驚掣吐呪者
明	1602	幼科準繩	鈎藤皮	(同上)	治嬰兒出腹血脈盛寒熱温壯四肢驚掣吐呪者若已能進哺中満食不消壯熱及変蒸不解中客人鬼氣并諸驚癇方

<破傷風を目的とする処方>

時代	年代	書名	配合生薬名	構成生薬名	効能
明	1573頃	薛氏医案	鈎藤鈎	龍胆草, 柴胡, 黄芩, 桔梗, 甘草, 芍薬, 茯苓, 大黄, 蛭虻	治月内臍風撮口四肢驚掣発熱吐乳及変蒸客忤鬼氣驚癇加人参当帰
	1602	幼科準繩	鈎藤	龍胆草, 柴胡, 黄芩, 桔梗, 赤芍薬, 茯苓, 甘草, 蛭虻, 大黄	治嬰孩小兒驚月内氣盛発熱臍風撮口壯熱
清	1742	医宗金鑑	鈎藤鈎	柴胡, 黄芩, 生甘草, 赤芍, 大黃, 龍胆草, 蛭虻, 桔梗, 赤茯苓	噤口

「鈎藤鈎」などとしており、関連を見出すことはできなかった。しかし、清代に入り、鈎つきの茎枝を薬用部位とした『本草備要』¹⁹⁾、『本草從新』²⁰⁾、『得配本草』²¹⁾などでは名称を「鈎藤鈎」または「鈎藤鈎」としており、名称が薬用部位に統一されるようになった。これらの関係を受けて、日本では「かざ」を薬用部位としたため「鈎藤鈎」と称されるようになり、中国では「鈎つきの茎枝」を薬用部位としてきたため「鈎藤」と称されるようになったものと考えられる。

また、専ら図に薬用部位を示した『本草原始』の付図には鈎つきの茎枝が描かれ、『本草彙言』では「去梗純用嫩鈎功力十倍」と述べながら、その薬用部位を記した図は鈎のみではなく植物全体が描かれている(図2)。これらのことから、李時珍の言を受けて鈎が良いとしながらも、実際には現在の中国市場品のような鈎つきの茎枝が一般的に利用されていたことが窺え、この習慣が現在に至っていると考えられる。

一方、日本には原植物のカギカズラが近畿、中国、九州地方に自生していたため、『本草綱目』の影響を受けて、独自に鈎のみが使用されるようになった

ものと推察される。

4. 医書中に見られる鈎藤鈎の薬用部位

医書中における鈎藤鈎の薬用部位について検討した。その際、「鈎藤皮」あるいは「鈎藤皮」の名称が記載されたものは藤皮由来とし、「鈎藤鈎」や「鈎藤鈎」と記載されたものは鈎つきの茎枝由来であると判断して検討した。その結果、「鈎藤皮」、「鈎藤皮」が初めて記載されたのは『備急千金要方』^{22a)}で、以後『外台秘要』^{23a)}、『太平聖恵方』^{24a)}、『聖濟総録』^{25a)}、『三因極一病証方論』²⁶⁾、『幼科準繩』^{27a)}などにその名称が見られた。一方、「鈎藤鈎」、「鈎藤鈎」が初めて記載されたのは『聖濟総録』^{25b)}で、それ以降、『幼科準繩』^{27b)}、『景岳全書』^{28a)}、『医宗金鑑』^{29a)}、『幼幼集成』³⁰⁾などにその名称が見られた。すなわち、明らかに藤皮を薬用に使っていたと考えられるのは宋代前半までで、宋代後半から明代前半までは藤皮と鈎つきの茎枝の双方が利用された時代であり、さらに現在のように鈎つきの茎枝を用いるようになったのは明代後半からであると判断された。

次に、同一処方中の本生薬の薬用部位が時代によって変化したか否かを調査した。その結果、宋代初期から明代後期を通じて、同一処方名でかつ同一

表 3 日本の古書における釣藤鉤に関する記載

時代	年代	書名	名称	別名	薬用部位	薬効	原植物の茎・葉・鉤の形態	産地
平安	918	本草和名	釣藤					
	984	医心方 ⁵⁷⁾	釣藤					
鎌倉	1284	本草色葉抄 ⁵⁸⁾	釣藤、 吊藤			小児十二驚癇	葉細長茎間有刺如若釣鉤	
室町	?	福田方 ⁵⁹⁾	釣藤				有釣鉤ノ如ナル者	
江戸	1612	新刊 多識編	釣藤	布知郡利波利		精粗無者 治小兒驚癇癰瘰客忤胎風發 斑疹治大人頭旋目眩		
	1681	本草辨疑 ⁶⁰⁾	釣藤鉤					
	1698	和語本草綱目 ⁶¹⁾	鉤藤					
	1713	和漢三才図会	釣藤	吊藤、布知止利波利	古方多皮ヲ用フ后世多 鉤ヲ用其力ノ鋭取ル	小兒驚癇眩	有之藤長八九尺或一二丈大如樛指其中空状如葡萄藤 長其茎間有刺若鉤鉤紫色。 木葉俱二堅シ初生糖ノ木葉ニ以タリ葉辺紫赤色葉細葉 無シ而々對生又後延蔓ス。 葉形チ櫻ノ葉ノ如クニシテ長ク廣シ蔓生又刺アリテ鉤ノ形 ノ如シ。 木蔓延ス茎初方ニシテ後円ナリ枝相對シテ出葉臘梅葉 ニ似テ滑沢ニシテ面而相對葉間アル刺、形鉤ノトシ・・・ 葉ハ紫藤ニ類シテ尖長光滑ミナ面々相直フ枝葉ノ間ダ 雙軟刺アリテ下ニ相向ヒ鉤鉤ノ形チヲナス。 葉櫻葉ノ如ク闊長シ後蔓生ス鉤大ナリ梅宮野外ノ者ハ圓 葉末尖リイヅキノ葉ニ似タリ鉤小ナリ筑前ノモノハ葉狭長 ナリ・・・釣藤反釣藤ノ木ノカワ。 年久キ者ハ藤蔓甚大ニシテ木ノ如クナル其蔓嫩ナル者 ハ方茎ノ如ク見ユ年ヲ経ル者ハ圓ナリ・・・嫩葉ハ微紅色 皆面對ス葉ノ微シ上ノ方ニ對シテ面鉤ヲ生ス其次ノ節ニ ハ里鉤を生ス又其次ニハ面鉤ヲ生ス・・・ 暖地の山中にあり藤蔓年を経るもの樹の如く三四月新葉 を生シ一節は約二つ次の節は約一つつなり其鉤扁くして曲リ 魚を釣針の如し。 藤蔓甚タ大ニシテ木ノ如ク、其嫩葉ハ方形、老レハ円シ、 葉卵円ニシテ尖リタル有柄五七対アリテ一鱗葉ヲナシ、 ソノ子葉腋毎ニ鉤ヲ生ス、一腋ハ兩対、一腋ハ單生、ソノ 鉤下ニ曲ル。 葉ハ卵圓形先端尖リ對生シ、其嫩茎ハ稍々方形ナレドモ 成熟スレハ圓形トナリ木質ニ變ス、鉤棘ハ葉脈腋ニ對生 シ下方ニ曲リ初メ緑色ナレド秋季ニ至レバ赤褐色ニ變 ジ、質ハ強堅硬実、状ハ魚鉤ノ如ク。	豐州中津ヨリ出ル者良シ芸州 広島ノ者之次 安藝州ヨリ多出シ 紀州熊野山中・・・豊前中津ニ 出ルヲ上品トス藝州廣島ノ産 ハ次ナリ 安藝遠江ニ産ス讃岐金毘羅 山ニサソスルモノ幹ノ大サ徑 尺三近シ 藝長二州山中尤モ多産ス太 和地方及ビ本土ニモマタアリ 豊前中津紀伊熊野大和春日 筑前日向延岡安藝廣島山中 及山坂梅宮ニ生ス 房州清澄山に産ス 城州和州藝州長州防州讃州 紀州遠州其餘諸州山中ニアリ
	1726	用藥須知 ⁶²⁾	釣藤鉤					
	? ～ 1753	採葉使記 ⁶³⁾						
	1763	物類品彙	釣藤	カラスノカギソル	葉間アル刺形鉤ノトシ 是ヲ釣藤鉤ト云小児方 中ニ用リ	小児方中ニ用リ		
	1763	花彙	天吊藤	サルトリグヒ	釣鉤ノ形チヲナス採取メ テ薬用ニ入ル			
	1778	千金方薬註	釣藤	釣藤皮、エビスノ鯛シ リ、カギイバサ、フチツ リ、リ、三年カズラ他				
	19c初	草木育種 ⁶³⁾	鉤藤	かぎつる	茎			
	1803	本草綱目啓蒙	釣藤	カギカズラ、フチトリバ キ、カギソル、サソ子 カズラ他、チヤウトバカ ウト云ハ誤ナリ	葉ニハ嫩鉤ヲ用ユルベ キ・・・選紫色去便純用 嫩鉤其功十倍ト			
	1828	本草図譜 ⁶⁴⁾	釣藤	牛角花、かきかいつら、 へうばかいつら、ふじと りばかり				紀州熊野豆州赤澤山及び青 野房州白カ台等の暖地の山 中にあり
	1833	草木図説 ⁶⁵⁾	鉤藤					暖地ノ諸州ニ産ス ソノ子葉腋毎ニ鉤ヲ生ス、一腋ハ兩対、一腋ハ單生、ソノ 鉤下ニ曲ル。 葉ハ卵圓形先端尖リ對生シ、其嫩茎ハ稍々方形ナレドモ 成熟スレハ圓形トナリ木質ニ變ス、鉤棘ハ葉脈腋ニ對生 シ下方ニ曲リ初メ緑色ナレド秋季ニ至レバ赤褐色ニ變 ジ、質ハ強堅硬実、状ハ魚鉤ノ如ク。
明治	1893	和漢薬考	釣藤鉤	吊藤鉤	鉤棘・・・刺釣鉤頭藤細 鉤多者、藤去純鉤用功 力加倍煎則力無	主トシテ瘰癧瘰癧トナス・・・小 児ノ寒熱十二驚癇ニ用ユ大 人頭旋目眩スルニ肝風ヲ平 ヲカニシ心熱ヲ治ス		多ク暖地ニ自生スル

構成生薬からなる処方「龍胆湯」のみであった(表2)。龍胆湯は『備急千金要方』^{22b)}に初収載された処方で、以降『千金翼方』³¹⁾、『外台秘要』^{23b)}、『聖濟総録』^{25c)}、『三因極一病証方論』、『幼科準繩』^{27c)}などに記載されているが、その薬用部位は全て藤皮であったと推測できる。これらのうち『幼科準繩』以外は共に藤皮を薬用部位とする時代の医書であるため、鉤つきの茎枝が用いられたことは考え難い。一方、

『幼科準繩』は鉤つきの茎枝を薬用とした時代の医書であるが、実際は藤皮を用いるように記載されている。このことは、過去の書物に掲載された処方箋をそのまま転記した結果であると考えられ、『幼科準繩』が書かれた時代に藤皮に由来する釣藤鉤が入手できたか否かは不明で、実際には龍胆湯にも鉤つきの茎枝由来の釣藤鉤が配合されていた可能性が高い。その根拠として、『幼科準繩』には釣藤鉤を配合する処方箋は数処方あるが、そのうち藤皮と規定されている処方箋は「龍胆湯」のみであることがあげられる。他に「鉤藤」の名称で収載されている処方箋の中に修治法として「和鉤」^{27d)}、「去鉤」^{27e)}と記載されている処方箋があることから、細い茎枝が利用されていたことは明白で、かつ『幼科準繩』が書かれた時代には細い枝のみが利用されるなど、薬用部位の細やかな使い分けが行われていたことが窺える。さらに、破傷風の治療薬として記載された同一処方内容で釣藤鉤すなわち鉤付きの茎枝が配合された龍胆湯(以下：龍胆湯②)が『薛氏医案』³²⁾に初見され、『幼科準繩』^{27f)}、『医宗金鑑』^{29b)}にも同様の処方が記載されている。『幼科準繩』では鉤藤の名で収載されているが、上記のような修治法が記載されていないため、鉤付きの茎枝を用いていたと推測でき、『薛氏医案』、『医宗金鑑』では共に「鉤藤鉤」の名称で記載されているので、龍胆湯②には全て鉤付きの茎枝由来の釣藤鉤が処方されていたと考えられる。

以上のことから、医書ではその処方が考案された時代に用いていた部位を規定してきたと考証した。よって、釣藤鉤に関しては藤皮を薬用部位とする時代に考案された処方箋には藤皮を用いて処方すべきであり、鉤付きの茎枝を用いる時代に考案された処方箋には鉤付きの茎枝を用いるべきであると判断される。

5. 日本における釣藤鉤(表3)

日本の古書に釣藤鉤が初見されるのは『本草和名』³³⁾で、「釣藤」の名称で収載されているが、この

時点では和名は記載されておらず、中国から伝来した生薬であったことがわかる。『多識編』³⁴⁾において初めて「布知都利波利」という和名が記載され、産地が初見されるのは『和漢三才図会』³⁵⁾で「豊州中津ヨリ出ル者良シ芸州広島ノ者之次」と記載されており、以降の本草書からは近畿、中国、九州地方に主産し、産地として日本国内の地名のみが挙げられており、また、中国から輸入していたという記載がいかなる書籍にも見られないことから、当時は輸入せずに自国で生産していたと考察できる。薬用部位に関して初見されるのは『和漢三才図会』で、李時珍の言をうけて「古方多皮ヲ用フ後世多鉤ヲ用其力ノ鋭取ル」と記載されて以降、『物類品鑑』³⁶⁾、『花彙』³⁷⁾、『本草綱目啓蒙』³⁸⁾、『和漢薬考』³⁹⁾では鉤または鉤付きの茎枝を薬用部位としている。藤皮に関する記載としては一別名として『千金方薬註』⁴⁰⁾に「釣藤皮」という記載が見られ、釣藤皮とは「釣藤ノ木ノカワ」という説明は見られるが、藤皮を用いるという記載は一切見られず、日本では古来鉤を主とする部位を用いてきたと考えられる。なお、原植物に関しても、『和漢三才図会』以降に見られる茎や鉤の形態から、古来カギカズラであったことが知られる。また、適応症に関しては中国同様、小児の癲癇、瘧疾、大人の頭痛に用いられ、現在ではめまい、頭痛、のぼせ、精神興奮症状、心悸亢進、高血圧などに応用される漢方処方に配合されている。

6. 「釣藤鉤」と「烈節」

『図経本草』には釣藤鉤のほかに、同属植物に由来すると考えられる生薬「烈節」が収載されている(図1)。記文は「烈節生榮州(現：四川省榮県東南)多在林菁中生味辛温無毒主肢節風冷筋脈急痛春生蔓苗茎葉俱似丁公藤而纖細無果實九月採茎暴乾以作浴湯佳」とあり、難波ら^{41a)}はこのものに *U. sinensis* をあて、図及び産地から本種である可能性が高いと考えられる。

このことから、釣藤鉤は主に *U. rhynchophylla* に由来する生薬であり、烈節は *U. sinensis* に由来する生薬であったと考えられる。このように『図経本草』において釣藤鉤と烈節が別生薬として扱われたのは、医を専業としていなかった蘇頌が釣藤鉤と烈節を別のものと認識していたためであると考えられ、このような例は威霊仙と鐵線など他の生薬にも見られる⁴²⁾。薬用植物に詳しい本草家は両者を同一物と

して、すなわち烈節をも釣藤鉤として扱った結果、釣藤鉤の原植物が多様化し、また薬用部位が本来の藤皮から烈節の薬用部位である茎になり、やがて鉤つきの茎枝に変化したことが考えられる。その根拠として、本草書中において釣藤鉤の採集時期は「三月」という記載しか見られないが、現在の採集時期は「春と秋」⁴³⁾または「秋と冬」²⁾であることがあげられる。これは烈節の採集時期である「九月」と釣藤鉤の採集時期である「三月」が合わさった結果であると考えられ、同様に薬用部位に関しても藤皮と茎が用いられるようになったが、やがて *Uncaria* 属植物に特徴的な鉤を含む枝を用いるようになり、鉤つきの茎枝だけが用いられるようになったと考察できる。

結論および考察

1) 釣藤鉤の基源について、歴代の中国本草書における形態、性味、帰経および産地の記載に大きな変化が認められないことから、原植物は古来変化しておらず、薬用部位のみが藤皮から鉤又は鉤つきの茎枝に変化したと考証した。また、原植物はアカネ科のカギカズラ *Uncaria rhynchophylla* (Miq.) Miq. であったと考証した。

2) 釣藤鉤の薬用部位に関しては、中国では宋代前半までは藤皮を、宋代後半から明代前半までは藤皮と鉤つきの茎枝の双方を、明代後半からもっぱら鉤つきの茎枝を薬用部位として用いてきたと考証した。明代の本草家は藤皮を用いるよりも鉤だけを用いた方が効果が2倍あるいは10倍ほど強くなると述べているが、薬用部位が藤皮から鉤又は鉤つきの茎枝に変化した詳細な理由については本草書の記載内容からは判断できなかった。筆者らは資源の枯渇が一因ではなかったかと考える。すなわち、カギカズラは生長して太い木質の蔓を形成するが、藤皮を採取するために根元で切ると、地上部は全て枯れてしまい、以後は残された根際から細い枝が数多く生えてくる。産地では次第に太い藤がなくなり、こうした細い枝が利用され始めたことが考えられる。実際、1998年に調査した福建省の産地では日本で見られるようなカギカズラの太い藤は見られなかった。また、『本草綱目』¹⁴⁾の付図(図2)は太い根から細い枝が2本出ており不自然であるが、これは太い藤を切った後の姿を記したものと判断され、本説を裏付けるものと考えられる。加えて、宋代に出現した「烈

節」との混用により、釣藤鉤の原植物が現在のように多様化し、採集時期が変化し、また大きな混乱もなく薬用部位が藤皮から鉤つきの茎枝に変化したものと考察する。

3) 以上のことから、藤皮を薬用部位として用いた明代前半までに考案された処方には藤皮を処方し、鉤つきの茎枝を薬用部位として用いた明代後半以降に考案された処方には鉤つきの茎枝を処方すべきであると考察した。現在、脳血管性痴呆に有効であるとされる「釣藤散」は「鉤藤散」の名で『太平聖恵方』^{24b)}に初収載され、以降『聖濟総録』^{25d)}、『普濟本事方』、『婦人大全良方』⁴⁴⁾、『丹溪心法』⁴⁵⁾、『寿世保元』⁴⁶⁾、『万病回春』⁴⁷⁾、『幼科準繩』^{27g)}、『景岳全書』^{28b)}などにも収載されているが、現在用いられている釣藤散と同一構成生薬からなる処方は『普濟本事方』(『婦人大全良方』)に収載されたものであり、藤皮を薬用部位としていた時代に考案された処方であるため、本処方には当初藤皮由来の釣藤鉤が処方されていたと判断される。一方、『幼科準繩』には「去鉤」の指示がある釣藤鉤があり、鉤を去った細い茎だけが使用されることがあったことを示している。鉤は茎枝に比してアルカロイド成分が少ないことが明らかにされており⁴⁸⁾、釣藤鉤の薬用部位に関しては、臨床研究などをも含め、今後さらなる検討が必要であろう。薬用部位による化学成分の相違については別報で述べる。

4) 日本の古典籍には釣藤鉤の中国からの輸入品に関する記載が全く認められず、また『和漢三才図絵』には日本における釣藤鉤の産地が記載されている。このことは日本に原植物の *U. rhynchophylla* が自生していて古来自国生産していたことを示すものと考えられ、また鉤のみを使用することは『本草綱目』の影響を受けたものと考察した。

文献

- 1) 厚生労働省：第十四改正日本薬局方第一追補，pp. 173～174 (2003)
- 2) 厚生労働省：第十五改正日本薬局方，p. 1242 (2006)
- 3) 国家薬典委員会編：中華人民共和国薬典2005年版一部，p. 180，化学工業出版社，北京 (2005)
- 4) 李時珍：本草綱目 (1596)，校点本，pp. 1319～1320，人民衛生出版社，北京 (1975)

- 5) 許叔微：普濟本事方 (12c. 中)，伊広謙主編，中医方剂名著集成，p.95，華夏出版社，北京 (1998)
- 6) 矢数道明：臨床応用漢方処方解説，pp.426～429，創元社，増補改訂版，大阪 (1981)
- 7) 張紹輝ら：「釣藤散，釣藤鈎及びそのアルカロイド成分の脳虚血予防作用：マウス水迷路学習行動を指標として」，*J. Trad. Med.*，**19**，pp.28～36 (2002)
- 8) 陶愼微撰，艾晟校定：經史證類大觀本草 (1108)，柯氏影印本 (1904) 影印出版本，p.407，広川書店，東京 (1970)
- 9) 中国文化研究会編纂：中国本草全書，華夏出版社，北京 (1999)；a) 陳衍撰「宝慶本草折衷」第21卷 p.287，b) 胡仕可編次「本草歌括」第83卷 p.300，c) 尚從善撰「本草元命苞」第22卷 p.285，d) 王綸輯「本草集要」第25卷 p.412，e) 皇甫嵩編「本草發明」第56卷 p.539，f) 李中梓原著「鐫補雷公炮製藥性解」第68卷 p.262，g) 周祐・周禧繪，周榮起文「本草図譜」第20卷 pp.358～359，h) 李中梓撰「医宗必読」第71卷 p.513，i) 郭佩蘭撰「本草匯」第86卷 pp.128～129，j) 楊時泰撰「本草述鈎元」第122卷 pp.26～27，k) 岳昶撰「藥性集要便読」第126卷 pp.259～260，l) 屠道和撰「本草匯纂」第139卷 pp.441～442，m) 張秉成撰「本草便読」第145卷 p.187，n) 王象晋原撰「本草撮要類編」第147卷 p.365。
- 10) 陶弘景校注，小島尚真・森立之ら重輯：本草經集注 (500頃)，p.88，南大阪印刷センター，縮刷影印版，大阪 (1972)
- 11) 寇宗奭撰，陸心源重刻：本草衍義 (1116)，卷15の3，広文書局有限公司，台北 (1981)
- 12) 楼之岑，秦波主編：常用中藥材品種整理和質量研究 (北方編) 第2冊，pp.955～1002，北京医科大学中国協和医科大学聯合出版社，北京 (1995)
- 13) 広東中藥志編輯委員会編著：広東中藥志，pp.347～350，広東科技出版社，広州 (1994)
- 14) 倪朱謨編：本草彙言 (1645刻本影印)，卷7の17，中医古籍出版社，北京 (1997)
- 15) 徐進業發行人：康熙字典，pp.1224，1226，1230～1231，文化図書公司，台北 (1967)
- 16) 諸橋轍次：大漢和辞典 卷十一，pp.12038～12040，12060～12064，大修館書店，縮寫版，東京 (1968)
- 17) 孝宗編，魯軍整理：御製本草品彙精要 (1505)，pp.3059～3062，九州出版社，北京 (2002)
- 18) 李中立撰：本草原始 (1612)，卷3の45，中医古籍出版社，北京 (1999)
- 19) 汪詡昂編撰：本草備要 (1694)，p.53，中国中医藥出版社，北京 (1998)
- 20) 吳儀洛編著：絵図増註 本草從新 (1757)，p.100，杏林書院，ソウル (1972)
- 21) 嚴西亭・施淡宁・洪緝庵同纂：得配本草 (1761)，p.110，上海科学技術出版社，上海 (1958)
- 22) 孫思邈：備急千金要方 (7c. 中)，a) 皮：pp.79～80，b) 龍胆湯：p.79，国立中国医藥研究所，台北 (1965)
- 23) 王燾：外台秘要 (752)，a) 皮：pp.413，986，988，b) 龍胆湯：p.988，国立中国医藥研究所，台北 (1964)
- 24) 王懷隱ら：太平聖惠方 (992)，a) 皮：p.2728，b) 鈎藤散：pp.2428，2584，2594，2600，2604，2694，2724，2728～2729，2733～2734，2736～2737，人民衛生出版社，北京 (1958)
- 25) 趙佶編：聖濟總録 (1111頃)，a) 皮：pp.2727，2783，b) 鈎：p.2788，c) 龍胆湯：p.2727，d) 鈎藤散：p.2735，人民衛生出版社，北京 (1962)
- 26) 陳言著「三因極一病証方論」：伊広謙主編，中医方剂名著集成，p.301，華夏出版社，北京 (1998)
- 27) 金壇王肯堂撰輯：幼科準繩 (1602)，a) 皮：卷9の46，b) 鈎：卷2の2，12，18，24，35，卷3の7，卷4の34，卷7の7，卷9の18，c) 龍胆湯：卷1の15，d) 和鈎：卷2の11，e) 去鈎：卷2の7，f) 龍胆湯②：卷1の15，g) 鈎藤散：卷2の18，新文豐出版，台北 (1974)
- 28) 張介賓編著：景岳全書 (1624)，a) 鈎：pp.1270，1298，1300～1301，1303，1305，1307～1308，b) 鈎藤散：p.1303，台聯風出版社，台北 (1972)
- 29) 吳謙等編纂：医宗金鑑 (1742)，a) 鈎：卷4の189，卷5の8，11～12，22～23，25～27，卷下の152，b) 龍胆湯②：卷5の8，医林書局，九龍，—
- 30) 陳復正輯訂：幼幼集成 (1750)，pp.36，121，上海科学技術出版社，翰墨園本校正重印，上海 (1938)
- 31) 孫思邈：千金翼方 (682)，p.126，国立中国医藥研究所，台北 (1965)
- 32) 薛己撰：薛氏医案 (1573頃)，p.764～83，上海古籍出版社，上海 (1991)

- 33) 與謝野寛・正宗敦夫・與謝野晶子編纂・校訂：本草和名 (918), 下巻の三, 日本古典全集刊行会, 東京 (1926)
- 34) B・H・日本語研究ぐるうぶ編：新刊 多識編 (1612), p.96, 文化書房博文社, 東京 (1973)
- 35) 寺島良安編：和漢三才図会 (1713), p.1382, 東京美術, 東京 (1970)
- 36) 平賀源内：物類品隲 (1763), p.60, 八坂書房, 東京 (1972)
- 37) 小野蘭山・島田充房著：花彙 (1763), pp.172~173, 八坂書房, 東京 (1977)
- 38) 小野蘭山著, 杉本つとむ編集：本草綱目啓蒙 (1698), p.277, 早稲田大学出版部, 東京 (1974)
- 39) 小泉栄次郎：和漢薬考 (1893), pp.203~205, 生生舎出版部, 東京 (1972)
- 40) 松岡定庵原著, 難波恒雄編集：千金方薬註 (1778), p.81, 医聖社, 東京 (1982)
- 41) 唐慎微等編著, 岡西為人・難波恒雄・李煥榮考訂：經史証類大観本草 (1108), a) *U. sinensis* : 証類本草図之学名考定 p.43, b) 表6 : p.411, 国立中国医薬研究所, 台北 (1971)
- 42) 御影雅幸ら：「*Clematis* 属植物とその関連生薬の研究 (第6報)『威霊仙』の本草学的考察 (1)」, 生薬学雑誌37 (4), pp.351~360 (1983)
- 43) 商務印書館香港分館発行：中薬材及其成方製剤, pp.205~206, 商務印書館, 香港 (1970). 錢信忠主編：中国本草色彩図鑑 常用中薬篇, pp.168~173, 人民衛生出版社, 北京 (1996)
- 44) 陳自明撰「婦人大全良方」：医説 鍼灸資生經 婦人大全良方, p.742-509, 上海古籍出版社, 上海 (1991)
- 45) 朱震亨著「丹溪心法」：天津科学技術出版社総纂, 金元四大家医学全書, p.1227, 天津科学技術出版社, 天津 (1996)
- 46) 龔延賢撰, 魯兆麟等点校：寿世保元 (1587), p.238, 遼寧科学技術出版社, 沈陽 (1997)
- 47) 龔延賢：増補万病回春 (1587), p.153, 医林書局, 九龍
- 48) 川添禎浩ら：「カギカズラの栽培と育種 (第2報) カギの採取法について」, 生薬学雑誌 43(2), pp.98~103 (1989)
- 49) 陳嘉謨撰, 王淑民・陳湘萍・周超凡點校：本草蒙筌 (1525), p.249, 人民衛生出版社, 北京 (1988)
- 50) 朱大年等選編：歷代本草精華叢書, a) 張介賓撰「本草正」二冊目の本草上の51, b) 関銭纂輯「本草詳節」第四冊巻2-12, 上海中医薬大学出版社, 上海 (1994)
- 51) 盧之頤 (子繇) 覈參, 冷方南・王斎南校點：本草乘雅半偈 (1647), pp.513~514, 人民衛生出版社, 北京 (1986)
- 52) 汪詡庵撰：本草易讀 (17c 後), p.200, 人民衛生科学出版社, 北京 (1987)
- 53) 潛江劉若金著作：本草述 (1664), 第6冊巻11蔓草部 pp.40~41, 上海万有書局, 上海 (1933)
- 54) 浦士貞匯輯「夕庵読本草快編」：鄭金生主編, 海外回帰中医善本古籍叢書, 第10冊 p.610, 人民衛生出版社, 北京 (2003)
- 55) 張璐著, 趙小青等校注：本草逢原 (1695), p.126, 中国中医薬出版社, 北京 (1996)
- 56) 黄宮綉著, 王淑民校注：本草求真 (1769), p.295, 中国中医薬出版社, 北京 (1997)
- 57) 丹波康頼撰：医心方 (984), 朝倉屋蔵版本影印本, p.30, 人民衛生出版社, 北京 (1955)
- 58) 惟宗具俊撰：本草色葉抄 (1284), 内閣文庫, 東京, p.404 (1968)
- 59) 有林著, 正宗敦夫編纂：福田方 (不詳：室町?), p.934, 日本古典全集刊行会, 東京 (1936)
- 60) 遠藤原理原著, 難波恒雄編集：本草辨疑 (1681), p.20, 漢方文献刊行会, 大阪 (1971)
- 61) 岡本一抱：和語本草綱目 (1698), p.712, 春陽堂復刻, 東京 (1975)
- 62) 松岡玄達原著, 難波恒雄編集：用藥須知 (1726), 卷二一六, 漢方文献刊行会, 大阪 (1972)
- 63) 採藥使記・草木育種：古事類苑, 植物部2, pp.680~681, 吉川弘文館, 東京 (1985)
- 64) 岩崎常正原著, 北村四郎・塚本洋太郎・木島正夫著：本草図譜 (1828), 第2巻 p.653, 同朋舎, 東京 (1988)
- 65) 飯沼慾斎原著, 北村四郎編註：草木図説 (1833), pp.82, 327, 保育社, 大阪 (1977)